北進論と玉井武の北海道英学史

齋　藤　　一

1. 序論

本論文は，アジア・太平洋戦争をはさんで活動した英語教師，玉井武を取り上げ，彼が小樽商科大学（小樽高等商業学校〔1910 年〕～小樽経済専門学校〔1944 年〕～小樽商科大学〔1949 年〕～現在に至る）に勤務していた時代の業績を再評価しようとする試みである。アジア・太平洋戦争期，小樽経済専門学校は，当時の国策であった北進論（「日本の対外政策の方向を朝鮮，中国東北，シベリアなど北方の大陸の方への帝国主義的膨張に求める主張」[1]）の中で，日本の大陸進出の拠点にふさわしい高等教育機関になるべく改革をすすめていたが，この学校の方針に玉井も影響を受けていた。顕著な例は，彼の北海道英学史－「日本に於ける英学発達史の研究は，今日までに相当の歳月を加えて来て居るにも係わらず，北海道は未だその研究対象として取り上げられる事なく放置されて居た」[2] 状況に対応しようというものーの確立への試みである。本論文は，北進論と玉井の北海道英学史との関係を概説し，後者の問題点を探るものである。[3]

2. 玉井武（1903 ～ 2001）について

現在，玉井武の名を知る者は少ないであろう。1991 年に小樽商科大学を卒業した私（齋藤）も,「商大」（小樽市民は小樽商科大学をこのように呼称する）を卒業して筑波大学大学院修士課程に進学したあとに，自分の母校の歴史について関心を持つようになったが，2011 年になるまでこの人物を知ることはなかった。しかし，2011 年に出版された労作，『小樽商科大学百年史』通史篇・資料編（以下『百年史』通史篇・資料編と略する）[4] によって，この学校の興味深い歴史について，そしてかつての教職員の業績についての詳細を知ることとなった。『百年史』によれば，玉井はアジア・太平洋戦争期を挟んだ 34 年間（1937 年～ 1961 年），小樽の地で英語（主に商業英語）を講じていた教師

であり，それゆえに戦争と文学・語学研究との関係を考えざるを得なかった人物であった。私は，日本が経験した戦争と英米文学研究との関係についての研究『帝国日本の英文学』（2006 年）を上梓し，その後は 1945 年以降の日本における英米文学研究と日本社会との関わりに関心を寄せてきたが，玉井は見逃してはいけない人物だったのである。

まず，玉井の生涯についてまとめておく。[5]

1903 年　生誕（生誕地などの詳細不明）
1923 年　小樽高等商業学校卒業，札幌第一中学校（現在の札幌南高校）に英語教師として赴任
1934 年　稚内中学校に転任，英語と実学（商業英語）を教授
1937 年　小樽高等商業学校に助教授として赴任
1938 年　学生を引率し修学旅行（朝鮮半島・満州）
1943 年　小樽高等商業学校の学生寮，正気寮の寮監に就任（～ 1959 年）
1961 年　小樽商科大学を辞任，藤女子大学（北海道札幌市）に赴任
2001 年　死去（享年 98）

この年譜に，以下のような，教え子による印象記を付け加えておくと，教師としての玉井の人柄が浮かび上がってくるだろう。

> 終戦直前，援農先の陸別でお盆休みに学生を集め「勤労奉仕も大変だが，勉強だけはしよう」とラフカディオ･ハーンの小説で英語の講義をされた。終戦後は夜，寮の食堂を訪れ寮生と英語の歌を歌い飢えを紛らわせてくれたりもした。（中略）寮火災のときは，下宿先に困っている者に，官舎の一室を開放してくれたりもした。（中略）誰かが言った。「寮焼失について黙って責任を取られたのは玉井先生だ」と。[6]

玉井が戦争中の「援農」（アジア・太平洋戦争期において労働力不足だった農村への勤労奉仕）中も学問を忘れなかった真面目な教師だったことがわかる引用である。私にとって非常に興味深いのは，玉井が，アジア・太平洋戦争における日本の国策，特に北進論のただ中で，自分に課せられた業務に真面目に関わっていったことである。このことを確認するため，現在わかるかぎりでの玉井の著書･論文･エッセイ他をまとめておく。以下は,『百年史』, 学生新聞『緑ヶ

丘』復刻版，後援会誌『緑丘』（墓目版），そしてインターネット文献調査サイト「小樽商科大学学術成果コレクション」（Barrel）[7] を利用して調査した結果である。なお，※は私による注釈である。

玉井武業績一覧

著書

(1)『わたしの西遊記』日東印刷，1980 年　※私家版。

翻訳

(2)『ヘンリ・ライクロフトの私記』　※ George Gissing, *The Private Papers of Henry Ryecroft* (1902) の翻訳であろうが，私は実物を確認していない。

研究論文

(3)「北海道産除虫菊」,『北方経済研究』(小樽経済専門学校北方経済研究所), 第 1 号，62-85 頁，1944 年
(4)「英国地方制度用語の研究」,『小樽商科大学開学記念論文集』第一冊, 95-109 頁，1949 年
(5)「北海道に於ける英学の発達」,『人文研究』（小樽商科大学）第 1 輯, 79-95 頁，1950 年
(6)「Ranald Macdonald」,『人文研究』第 3 輯，107-128 頁，1952 年
(7)「「ヘンリ・ライクロフトの私記」に於ける田園の美について」,『人文研究』第 5 輯，19-30 頁，1953 年
(8)「北海道に於ける英学の発達：開拓使より各領事館への英文書翰綴りを中心に」,『人文研究』第 7 輯，105-133 頁，1954 年
(9)「小泉八雲と日本」,『人文研究』第 9 輯，113-132 頁，1955 年
(10)「カサリン・マンスフィールドについて」,『人文研究』第 11 輯, 83-98 頁, 1956 年
(11)「GEORGE GISSING ——彼の読書について——(1)」,『人文研究』第 13 輯，95-104 頁，1956 年
(12)「マンスフィールドと弟レズリー・ビーチャム」,『人文研究』第 16 輯, 23-35 頁，1958 年
(13)「キャサリン・マンスフィールド」,『人文研究』第 20 輯，45-67 頁,

1960 年
(14)「キャサリン・マンスフィールド」,『小樽商科大学創立五十周年記念論文集　人文研究篇』, 小樽商科大学創立五十周年記念論文集編集委員会, 889-933 頁, 1961 年　※『人文研究』の第 21･22 輯扱いになっている。

新聞・雑誌記事他

(15)「国策移民の一貌（一)」,『小樽高商　緑丘新聞』第 116 号, 1938 年 10 月 25 日
(16)「国策移民の一貌（完)」,『小樽高商　緑丘新聞』第 117 号, 1938 年 11 月 25 日
(17)「書燈」(中井省三著『大東亜交易経済論』, 峰岸米造著『日本近世百年史』),『小樽経専　緑丘新聞』第 188 号, 1944 年 10 月 25 日
(18)「常磐村の援農を憶ふ」,『小樽経専　緑丘新聞』第 189 号, 1944 年 11 月 25 日
(19)「浜林先生の面影」,『緑丘新聞』第 205 号, 1948 年 5 月 31 日
(20)「大阪・東京同窓訪問記」,『緑丘新聞』第 214 号, 1949 年 11 月 24 日
(21)「ストリー氏と私」,『緑丘新聞』第 215 号, 1949 年 12 月 15 日
(22)「英語よもやま話」（速川浩との対談),『緑丘新聞』, 第 278 号, 1956 年 7 月 7 日
(23)「皮膚怨記」,『小樽商大緑丘新聞』第 282 号, 1957 年 2 月 5 日
(24)「忘れえぬ学生達」,『小樽商大緑丘新聞』第 314 号, 1960 年 7 月 18 日
(25)「大久保君（大 12）を囲んでの小樽の会」,『緑丘』（蟇目版）15 号, 17 頁, 1960 年 8 月
(26)「新刊紹介『ヨーロッパを翻る』　著者（大久保氏）の誠実と熱情にうたれる」,『緑丘』（蟇目版）28 号, 10 頁, 1962 年 11 月
(27)「読者の声　村瀬玄先生を悼う」,『緑丘』（蟇目版）33 号, 6 頁, 1963 年 9 月
(28)「読者の声　アメリカでも」,『緑丘』（蟇目版）41 号, 4 頁, 1965 年 1 月
(29)「苫米地先生と緑丘　商業英語を中心に」,『緑丘』（蟇目版）47・48 号, 10 頁, 1966 年 2 月
(30)「懐かしい人　ストリーさん」,『緑丘』（蟇目版）59 号, 19 頁, 1968 年 2 月

(31)「ディスカバー・トラベル」,『緑丘』(蟇目版) 87 号, 10 頁, 1973 年 1 月
(32)「セールスマンの死」,『緑丘』(蟇目版) 88 号, 84 頁, 1973 年 6 月

講演他

(33)「成人教育講座　(二) 婦人講座　「東亜経済の特性」」, 1944 年
※詳細不明
(34)「各教授学会に出席」,『緑丘新聞』第 229 号, 1 面, 1951 年 6 月 15 日
※「玉井助教授は大阪大学に於ける日本英文学会出席のため近日離樽の予定」とある。

玉井関連記事

(35)「洋書への態度」,『小樽高商　緑丘新聞』第 128 号, 3 面, 1939 年 10 月 25 日　※アンケート記事:「一, 学生に奨むべき洋書に就て　二, 感銘深き洋書は　三, 洋書に対する意見　に関して左の如く解答を寄せられた」というもの。
(36)「大正十二年玉井武君を大阪に迎えて」,『緑丘』(蟇目版) 23 号, 25 頁, 1962 年 1 月
(37)「緑丘通信　《G. R. Storry さんから》」,『緑丘』(蟇目版) 84 号, 25 頁, 1972 年 5 月
(38)「新刊書」(玉井武『エクセター訪問記』〔藤女子大学・藤女子短大紀要抜粋〕),『緑丘』(蟇目版) 84 号, 27 頁, 1972 年 5 月
(39)「私の推薦する緑丘人の著書」,『緑丘』(蟇目版) 84 号, 27 頁, 1972 年 5 月

この業績一覧を見るならば, やはりアジア・太平洋戦争期の仕事に注目せざるを得ないであろう。例えば,「新聞・雑誌記事他」を見ると,「国策移民の一貌」という記事が 1938 年 10 月と 11 月に学生新聞『小樽高商　緑丘新聞』に掲載されていたことがわかるが ((15) と (16)), これは玉井他の教員が学生を満州への修学旅行へ引率していった際の印象を語ったものである。この修学旅行について,『百年史』は次のように述べている。(以下本論文のすべて引用文において,〔　〕内は私による補足である。)

玉井武は，実際に「満州国」各地の日本人移民地を視察してえた見聞をもとに，第一一六号と一一七号で「国策移民の一貌」を報告する。その結びは，「第一次移民地弥栄村，第二次移民地千降郷ともに，今や独立経済の域に達し，村行政及び農事組合の形を整へ，其の基礎を確立し，まさに第二期計画を樹立し，躍進一番せんとしつつある現況にして，第三次以下も之についで鋭意経営を進めつゝあり。北満の広野に鍬をとりて民族協和の実をあげ，産業の開発，国防の充実に貢献し，他方文化の向上に資しつつある移民の姿こそは，日満不可分の関係を如実に語るものというべきか」（三八年一一月二五日）となっている。[8]

〔一九〕三八年七月の修学旅行では，小林象三と玉井武を引率者に，四七名が朝鮮・「満州」を回っている。帰校後の「満鮮視察旅行　感謝報告会」では，「満州大豆に就て」「満州の労働事情」「満州の大陸経営」「弥栄村に就て」などを報告している。第一次武装開拓移民団として知られる「弥栄村」に分宿した経験をもとに，「同化し難い日本人が，満州に於て現実を前視して生活するためには，祖国愛を以て骨を埋める覚悟を必要とする」（『緑丘』第 115 号，38 年 9 月 25 日）と語る。玉井は『緑丘』紙上に「国策移民の一貌」を執筆した。[9]

アジア・太平洋戦争期の高等教育機関の教員と日本の北進論との関わりの実態を物語る一例として記憶しておくべきだろう。

もう一点，興味深い事実を指摘しよう。「研究論文」を見ると，玉井は英語教師であるにもかかわらず，1944 年に「北海道除虫菊」(3) という論文を書いていたことが分かる。これは南方戦線で兵士の健康を守るために必要な除虫菊（蚊によるマラリア感染の予防）の生産地として北海道が極めて適当な地であることを論じたものである。こうしてみると，アジア・太平洋戦争期の玉井は，日本の北方進出のみならず南進論をも意識して，自分に与えられた様々な業務を忠実にこなしていたと言ってよいだろう。

無論，このような校務をこなしていた教員は玉井だけではないだろう。私が玉井に注目する理由は，北進論という国策が，玉井の校務のみならず，彼の研究にも影響を与えていたからである。このことを議論する前提として，1944 年の小樽経済専門学校の状況を確認しておきたい。

3. 北方の中心地としての小樽経済専門学校

日本がアジア・太平洋戦争を戦っていた時期，小樽高等商業学校はいわゆる北進論，すなわち日本の活路を中国大陸進出に見いだしていこうとする議論に与していた。一例をあげる。小樽高等商業学校が小樽経済専門学校と改称された 1944 年，当時の校長であった苫米地英俊は，紀要論文集『商学討究』の改題にあたって，次のような文章を書いている。

> 緑丘学園と共に長い歴史と伝統を誇る吾等の研究発表機関たる「商学討究」が「北方経済研究」と改題せられて近く世に送られることになつた。回顧すれば三十有余年の昔，小樽高等商業学校が創立せられたとき，産業調査会が開設せられ，北海道産業の資料蒐集，調査論文の発刊に努力し，各方面より多大の関心を寄せられてゐた。昭和七年にそれが改造せられて「北海道経済研究所」となり，従来よりも研究に重点を移すことになり，研究発表も益々旺盛に赴いたのであるが，支那事変の進行につれ，大陸の経済問題に関心を持つ傾向が次第に濃厚となり，北海道だけでは狭隘に失するという説が台頭し，遂に昭和十六年に「経済研究所」と改称するに至つた。然るに大東亜戦争に刺戟されて世間の眼が悉く南に向けられるに及んで，北方の経済は殆ど顧られなくなつて来た。是に於いて，地域的分担からいふてもこれは我が学園が担当すべきであるといふ自覚が生まれ出で，今春「北方」を従来の名称に冠することになつた。[10]

> 学堂は常に静寂，学者は自由に真理の探究に一意専心し得ることが極めて望ましい。併し超然世間と絶縁して象牙の塔に立て籠るだけが真の学者の本分と心得るも如何かと思はれる。時と所とを超越した普遍の真理探究に余事を顧ないのも確に一つの行方であるに違いないが，差別観に住して地に足のついた研鑽に没入するのも亦学者の一進路たるを失はない。今我々が北方経済と地域を限定したことの中には具体的問題を対象として国家と時局とに関連の深い研究を意図としてゐることが含まれてゐるのである。[11]

これら二つの引用は苫米地の方針を雄弁に語っている。北進論と高等教育機関との関係を如実に語っている点において，記憶にとどめておく価値がある。

重要なことは，このような発言をしていたのは苫米地だけではなかったということである。統計学・人口学を講義していた南亮三郎も同様であった。『百年史』によれば，大学新聞『緑丘』175 号（1943 年）には次のような記述があった。

> その〔『緑丘』〕第一七五号〔1943 年〕の見出しは「北方文化への啓発」であり，南の「学会を終へて語る」には「学都小樽の建設こそ必要」となっていた。晩さん会での丸谷〔喜市，神戸大学学長〕や大内〔兵衛〕の小樽評に示唆を受けたとして，商都として発展した小樽は今後「学都」への転換を図るべき，というもので，南はさらにそれと密接に関連する小樽高商の行く末についても提言する。
>
> この学園を更に内容の上からも形の上からも拡充して，学都小樽の中心勢力となつて幾多の人材を養成して行くと共に，謂はゞ北方に於ける開発経営の中心地たらしめる原動力を，この学園を囲んで育成して行く必要があると思ひます。そういふ形で小樽は新しい発展の方向を与へられるということが出来るのではないかと思ひます。謂はゞ大陸政策の根本的基地として起つて行く途です。[12]

興味深いことに，苫米地や南の発言を玉井は自分の学問において確実に受け止めている。ただし，彼が北進論を自らの学問に反映させていこうと試行錯誤する間に，アジア・太平洋戦争は終了してしまった。彼の試行錯誤は 1950 年になってはじめて世に出ることになる。[13]

4. 北海道英学史という企て

1945 年 8 月 15 日以降，玉井が最初に世に出した論文は「英国地方制度用語の研究」（1949 年）（4）である。ただし，これはアンドレ・モーロワ『英国史』（André Maurois, *Histoire d'Angleterre*〔1937〕）からの抜粋と翻訳を中心とした読書ノートというべきものであり，研究熱心であった玉井の人柄は伝わってくるが，本論文においてはこの論文についての詳細な議論は必要がないと思われる。本論文で注目したいのは，玉井の，日本英学史の中に北海道を位置づけようとする試みである。

玉井の北海道英学史論は以下の三本の論文として世に出ている。

(5)「北海道に於ける英学の発達」(1950 年)
(6)「Ranald Macdonald」(1952 年)
(8)「北海道に於ける英学の発達：開拓使より各領事館への英文書翰綴りを中心に」(1954 年)

本論文では(5)について詳述するが，その前に(5)(6)(8)の論文について一言しておく。(6)は(5)の英語版, 特にMacdonaldに焦点を当てた簡略版である。(8)は，玉井曰く「昭和 28 年〔1953 年〕度北海道科学研究費補助金による研究の一部である」[14] が，これは主に函館市においておこなった北海道開拓史時代の古文書調査の報告である。江戸末期の英学史に焦点を当てた(5)において触れることのできなかった，明治初期の英学史についての報告であり，資料的な価値があるものだが，この論文以降の研究論文のタイトルと内容から判断すれば，玉井はこの調査を継続せずに打ち切ったようである。玉井の英学史に対する関心のあり方を如実に示すものは(5)であろう。以下，玉井の「北海道に於ける英学の発達」(1950 年) から引用し，玉井の狙いを明らかにしてみたい。

まず序文から重要箇所を引用する。下線は私の手になるものである。

> 日本に於ける英学発達史の研究は，今日までに相当の歳月を加えて来て居るにも係わらず，北海道は未だその研究対象として取り上げられる事なく放置されて居た。然るに今を去る約百年，嘉永の末期にアメリカの軍艦を率いて，提督ペルリが来朝した時に，幕府と米国使節との間に立つて，条約成立に蔭ながら尽力した森山栄之助外十三名の通詞達に，わが国はじめての Living English を教授した人は，その名を Ranald Macdonald と云い，嘉永元年（1848）利尻島に漂着した米人である。宗谷から松前に護送され，更に長崎に廻されて取調をうけ，同地閉居中を利用して，前述の通り若い通詞達に英語教授の機会を持つたのであるが，吾が通詞の和蘭式発音を匡正し，鎖国的な英語の学習を正道に導く最初の機会を与えて呉れた英学の恩人が，北海道の一離島に漂着して始めて日本の土を踏むに至つたと云う事は，実に深い興味を吾々になげかけてやまない。
>
> さらにその十四弟子の中で名村五八郎・堀達之助の二名はペルリの箱館来航以降，次第に海外との接触の繁くなる北部日本唯一の開港場に於て，箱館奉行の下に通詞として勤務し，その傍ら後進の指導に任じたのである

が，名村五八郎は，つとに嘉永年間に出版せられた「エゲレス語辞書和解」の編者の一人であり，堀達之助は，我国最初の活字本英和辞書たる「英和対訳袖珍辞書」の主任編集者である。此の様な幕末における英学の代表的人物を北陬の地に迎えて，北海道－当時の蝦夷地－が英学入門第一歩を踏み出し得た事は，之亦北海道英学発達史上軽視することの出来ない事柄である。

北海道が欧米諸国と最初の交渉を持つてから今日まで約三百年を経過して居るが，此の論稿では当初から徳川末期までの二百余年を研究の対象とする。[15]

この引用を読んで私が感じるのは，日本の英学史に北海道の存在を位置づけようとする玉井の欲望である。

まず，指摘しておきたいのだが，「日本に於ける英学発達史の研究は，今日までに相当の歳月を加えて来て居るにも係わらず，北海道は未だその研究対象として取り上げられる事なく放置されて居た」という言葉は，文字通り受け取る訳にはいかない。なぜならば，玉井は，北海道の北辺にある稚内市の西にある利尻島に 1848 年に漂着したアメリカ人 Ranald Macdonald について，すなわち 1853 年のペリー来航時に活躍した「森山栄之助外十三名の通詞達に，わが国はじめての Living English を教授した人」について論じると述べているが，このマクドナルドを日本で始めて紹介したのは玉井ではないからである。マクドナルドについて入手しやすい研究書としては，ウィリアム・ルイス，村上直次郎編『マクドナルド「日本回想記」－インディアンの見た幕末の日本』（1979 年，再訂版 2012 年）という翻訳書がある。その訳者である富田虎男によれば，ルイス・村上が編集したマクドナルド「日本回想記」の英語原本（玉井の研究もこれに寄っている）の出版が 1923 年であり，その後 1930 年には重久篤太郎「日本の英学の先駆ラナールド・マクドナルド」が研究の先鞭をつけ，少なからぬ研究者がマクドナルドについて論じ始めたのだが，この人物の名前を一般に広めたのは, 1935 年 5 月 1 日付の「『東京朝日新聞』の社会面トップ記事「サムライの英語教師－北米カナダ国境に埋る墓標の主　ペルリ来航前のマ翁と判り高原に建つ記念碑」だったという。[16]

ただし，これらの先駆的研究や報道が，当時の日本英学史の中に取り込まれていたわけではなかった。玉井は論文中では明示はしていないのだが，時代的に彼が意識していてもおかしくなかった豊田実の大著『日本英学史の研究』（岩

波書店，1939 年）には，「沖縄に於ける英学の伝統」の一章はあるが，「北海道に於ける英学の伝統」はない。また，玉井が言及している通訳たちについては豊田も言及しているが（堀達之助については複数回触れている），マクドナルドについては「森山栄之助其の他の蘭通詞がアメリカ印度人の血を受けた米国人ラナルド・マクドナルドから長崎で英語を教はり，それがペリ来航の時多少の役を努めた例もある」（170 頁）と記述するのみであり，マクドナルドと北海道との関係については語ってはいない。つまり玉井の論文は全く未知の事実を発掘したものではなく，ある意図をもって，既知の事実を日本英学史の中において新しく意義づけようとしたものである，ということになる。

玉井の意図は引用半ばに明快に記してある。「長崎に廻されて取調をうけ，同地閉居中を利用して，前述の通り若い通詞達に英語教授の機会を持つたのであるが，吾が通詞の和蘭式発音を匡正し，鎖国的な英語の学習を正道に導く最初の機会を与えて呉れた英学の恩人が，北海道の一離島に漂着して始めて日本の土を踏むに至つた」。玉井はマクドナルドの利尻島漂着と，彼が弟子たちにおこなった「正道」としての英語教育の江戸末期の対米外交における重要性と影響力を語ることで，日本英学史の起源に北海道という場を刻み込み，その意義を強調し，「北海道英学〔の〕発達」を試みているわけだが，この論理は，この論文が世に出る 6 年前，同じ職場の幹部たちが盛んに用いていた論理とよく似ている。どちらも中心（本州）と，中心から見た周縁であるところの北海道の存在を確認しつつ，中心と周縁の構図を再生産してゆくというものである。

この論理には注意すべきである。例えば，すでに確認したことだが，1944 年の苫米地や南の発言においては，南進論が注目される中で，北進論の立場を推進するために，小樽経済専門学校を北方の（経済に重点をおいた）学問のあらたな中心地とすることが強調されている。こうなると，アジア・太平洋戦争中においては珍しいことではないが，あらたな中心としての小樽から見た周縁となる，例えば満州の農村に暮らしていた人々，日本人移住者や満州国建国以前にこの地に住んでいた人々の存在や声が，見いだされにくくなるだろう。このことを，玉井の論文の文脈においてとらえ直してみると，日本の「正道」としての英語学習の創始者が北海道利尻島に漂着した事実を強調し，「北海道英学史」の「発展」を希求するという二元的でシンプルな議論は，北海道の中における複雑さ，例えば玉井が云うところの「インデアン」であるマクドナルドと，利尻島で出会ったアイヌや和人たちとの手探りのコミュニケーションの重

要性などが見えてこなくなるということになる。

この点についてはもう少し具体的に述べる。玉井もマクドナルドが「インデアン」であったことには触れていたが，その触れ方には中心と周縁の論理が色濃い影を落としている。少し長くなるが，マクドナルドの紹介も兼ねて引用しておく。

> Macdonald はスコットランド人の父とアメリカ・インデアンの母の間に生まれた運命の子で，長じて一人の夫人と恋愛問題が生じた時，彼がインデアンの血をひいて居ると云う事が妨げとなつて，彼は此の結婚を断腸の思を以てあきらめなければならなかつた。偶々東洋の孤島日本に関する多少の知識を持つて居た多感の青年 Macdonald は，太平洋の彼方に眠る孤島日本への渡航の決心を固めたのである。新しい天地に於ける彼の希望は，近い将来に開かれる筈の日米通商の際に，通訳として活躍することにあつたものの様である。
>
> 彼は日本渡航の手段として船員になる事を考え，一八四五年（我が弘化二年）に捕鯨船 Plymouth 号に乗組み，一八四八年（我が嘉永元年）の春には，二十四歳の青年として憧憬の日本海に至り，船長の了解を得て，母船から孤舟に移り，自らの手で母船と孤舟をつなぐ綱を断ち切つた，その場所は実に北海道の近海であつた。
>
> A sailor, in his manhood, has tears! – Myself, with averted face, had to cut the rope by which I hung to all them. I left in the cord the strong electric sympathy bursting from the true friendly hearts of my comrades. これは彼が親船との別離の苦衷を物語つた端的な述懐であるが，惻々として胸をうつものがある。七月二日利尻島に漂着，宗谷勤番所から松前表にまわされ，一応の取調の後江良町村漂着の米人十五人と一緒に長崎に護送されたのは十月の中頃であつた。翌嘉永二年（1849）四月に漂流米人引取りのために米国軍艦 Preble 号が長崎に入港する迄の半歳，幽囚の身を以て特に許されて長崎の通詞達に英語の教授を行うと共に，海外事情の知識をも与えて居る。これより先徳川幕府は英語の必要性を痛感して，長崎の和蘭通詞達に和蘭語の外に英語の習学を命じ，通詞達は文化六年（1809）より，英語の研究を和蘭人 Jan Cock Blomhoff について始めるに至つた。本邦に於ける英学研究の曙はここに始まるのであるが，和蘭式発音の指導をうけたために，彼らの英語は英米人の耳には実に異様に

きこえたらしく，Macdonald も彼の応接に当つた和蘭通詞森山栄之助の英語を，

His pronunciation was peculiar.

と評して居る。従つて此の和蘭流の発音を米国式に修正して本格的な英語教授によつて日本に正統英学の種子をおろした所の恩人は，北海の一孤島利尻に漂着した米国青年 Ranald Macdonald に外ならぬのである。これは実に，我が国英学史上に於て，特筆大書さるべき事柄である。此の時 Macdonald の教えを親しく受けた者は，森山栄之助，本木庄左右衛門等通詞中の学才十四名であるが，後に箱館の英学創始に貢献するところ大なる名村五八郎，堀達之助の二名をその中に見出す事は，Macdonald と漂着地「北海道」とを結ぶ絆として感慨深いものがある。[17]

この引用において注目すべき点は二点ある。一点目は，すでに論じたように，アメリカ人マクドナルドの北海道利尻島への漂着を日本英学史の起源に刻み込み，北海道という周縁を新たな（日本英学史の）中心として立ち上げようという（「日本に正統英学の種子をおろした所の恩人は，北海の一孤島利尻に漂着した米国青年 Ranald Macdonald に外ならぬのである」），アジア・太平洋戦争期の北進論に似た論理である。

より重要なのは二点目である。すなわち，玉井がマクドナルドの「インデアン」としての複雑なアイデンティティ形成の問題を掘り下げていないことである。引用から分かるように，玉井はマクドナルドが「インデアン」であることには触れている。しかし，玉井の文章を読む限り，マクドナルドは，スコットランド人の父とネイティブ・アメリカンの母の間に生まれた「インデアン」としての苦悩から解放されるためであるかのように北海道に漂着し，そこで日本人に「正当英学の種子」をおろすということになっている。それはあたかも「インデアン」マクドナルドが，日本で「正当」な英語教育を実践することによって，「米国青年」としての正当性を得たかのようである。

この（マクドナルドにとって，そして玉井にとっての）正当性を獲得することを重視した文脈において見逃されるものは多い。例えば，上述の富田虎男は，「アメリカのアイヌ人にあたるインディアンの子マクドナルドが日本で最初に出会ったのが，日本のインディアンにあたるアイヌ人であったという事実に，訳者はなにか運命的なめぐりあわせを感じ，マクドナルドに魅せられていった」[18] と述べている。富田はさらに続けて，マクドナルドの「インデア

ン」としての葛藤や，正当な米語に対する複雑な感情，そしてマクドナルドが北海道利尻島において最初に出会ったアイヌとの手探りのコミュニケーションといったテーマに触れているが，[19] 玉井の論文の文脈ではこれらのテーマが探求される余地がないのである。実際，玉井は（マクドナルドや富田が述べている）利尻島におけるマクドナルドとアイヌの出会いについて，そして彼らのコミュニケーションを仲介した翻訳者たちについては全く触れていない。例えば，注 17 の引用には「七月二日利尻島に漂着，宗谷勤番所から松前表にまわされ」とあるが，この読点のところには，マクドナルド自身は書いていたいくつかのエピソードが挿入されてもよかったのである。――例えば，利尻島上陸の翌日（1848 年 7 月 3 日）の午後，マクドナルドは「アイヌ言葉を私の石版に書くことに費やした。その作業は，見物人たちを楽しませたようであった」。[20] また，アイヌ人の習俗や礼拝についてマクドナルドに説明してくれた「いつも変わることなく誠実なーと私が信じるータンガロ〔和人の番人，多次郎〕」[21] は，「対象を指して，眼と口を開き熱心に耳をかたむけてその英語名を尋ね，その英語名をむさぼるようにのみこみ，どうにかして自分の記憶板に深く刻みつけようとするようであった」。[22]

残念ながら，こうしたエピソードが示唆するさまざまな関係のさまざまな始まりは，もっぱら中心たる日本（本州）と周縁たる北海道との関係性に注視していた玉井の北海道英学史には取り込まれることがなかったのである。

5. 結論

本論文では，玉井武の北海道英学史に通底する中心と周縁の論理を指摘し，その背景としての北進論の存在を指摘した。異文化コミュニケーション論やポストコロニアル批評に何か意義があるとすれば，まさにこのような北進論の論理，中心と周縁の論理を丁寧に批判し，その代替案を提案してゆくことだろう。もちろん，玉井の仕事に対する私の批判は，私自身の過去現在未来の仕事をえぐることになる可能性がある。自戒したい。

なお，ここで玉井の仕事について付言しておけば，1954 年の論文を最後に北海道英学史の「発達」を押し進めるのをやめた玉井は，1956 年の論文「カサリン・マンスフィールドについて」以降，キャサリン・マンスフィールドについて，特にその幼少期と弟との関係について論文を書いているが，これは注目に値するかもしれない。つまり，日本の北辺である北海道小樽市に住みつ

つ，大ブリテン島から見れば遥かな辺境のニュージーランドに生まれた作家の幼少期について書くことは，中心と周縁の論理を今一度見つめ直すきっかけになるかもしれないからだ。玉井は北海道英学史における中心と周縁の論理を反復して，マンスフィールドがニュージーランドから大ブリテン島へ移動し，イギリスの作家として文学史上に名前をとどめることになったことを言祝いだのだろうか。あるいはそうではなかったのだろうか。マンスフィールドの弟との関係に深い関心を寄せていた玉井は，イギリス作家としてではなく，ニュージーランド人としてのマンスフィールドを強調しようとしていたのかもしれない。しかしこの議論については稿を改めることとしたい。

注

※本論文は，科学研究費補助金（基盤研究(C)）「日本の〈辺境〉における英文学研究に関する研究－沖縄と北海道を中心に」（平成 24 年～ 26 年，課題番号：23520284，研究代表者：齋藤一）による調査研究の成果の一部である。なお，本論文の一部分は，文学受容変容研究会第 2 回研究会（2012 年 12 月 27 日，於：東洋大学白山キャンパス）においておこなった口頭発表，「〈北方〉と混淆性――玉井武「北海道に於ける英學の發達」(1950) について」と内容が重なるところがある。

1．『世界大百科事典』第 2 版の CD-ROM 版 ver.2.2.0（日立システムアンドサービス，2008 年）の電子版より引用した。なお，北進論と対照的な政策としては南進論があった。同事典によれば「日本は 15 年戦争において，南方に進出し大東亜共栄圏を建設することによって不足しがちの資源を確保し，自給自足地帯をつくろうとした考え方。南進政策ともいう」とある。
2．注 15 を参照せよ。
3．本論の議論の枠組みは，レイモンド・ウィリアムス『田舎と都会』（原著は 1973 年）と河野真太郎『〈田舎と都会〉の系譜学』（2013 年）に負うところが多い。
4．小樽商科大学百年史編纂室編『小樽商科大学百年史』通史編・学科編，小樽商科大学出版会，2011 年。
5．以下の資料を適宜利用した。「新助教授講師紹介」，『緑ヶ丘』第 99 号（1937 年 4 月 29 日），2 頁。金沢康雄「－人と自然をこよなく愛した－玉井武先生を憶う」，『緑丘』90 号，2001 年，148 頁。なお，金沢は昭和 25 年（1950 年）の卒業生。
6．中本毅彦「故玉井武先生を偲ぶ会（正気寮 OB 会）」，『緑丘』91 号，2002 年，105 － 106 頁。中本は昭和 32 年（1957 年）の卒業生。
7．『小樽商科大学新聞　緑丘』は不二出版から 1992 年に全 3 巻の復刻版が出版されており，調査にはこの版を利用した。後援会誌『緑ヶ丘』は，蓙目版と現行版が存在するが，本論では小樽商科大学図書館に所蔵されている蓙目版を利用した。Barrel（http://barrel.ih.otaru-uc.ac.jp/）は，小樽商科大学の紀要類がほぼ全てウェブ上で読める優れたサイトである。
8．『百年史』通史編，464-465 頁。
9．同上，504 頁。
10．苫米地英俊「改題の辞」，『北方経済研究』第 1 号，1944 年，1 頁。

11. 同上，3 頁。
12. 『百年史』通史編，504 頁。
13. 北進論の論理に影響を受けた教員は玉井だけではない。峯村文人「日本古典文芸と北方的性格」(『小樽商科大学開学記念論文集』第一分冊, 1949 年, 39-76 頁) という論文がある。
14. 玉井武「北海道に於ける英学の発達：開拓使より各領事館への英文書翰綴りを中心に」,『人文研究』(小樽商科大学) 第 7 輯，105-133 頁，1954 年，133 頁。
15. 玉井武「北海道に於ける英学の発達」,『人文研究』第 1 号，1950 年，79 頁。
16. ルイス，ウィリアム，村上直次郎編，富田虎男訳訂『マクドナルド「日本回想記」－インディアンの見た幕末の日本』再訂版，刀水書房，2012 年，230 頁。
17. 玉井武「北海道に於ける英学の発達」，84-85 頁。
18. 富田虎男「解説－ラナルド・マクドナルド評伝」，ウィリアム・ルイス編『マクドナルド「日本回想記」－インディアンの見た幕末の日本』，230-231 頁。
19. 富田「解説」(224-279 頁) を参照せよ。なお, この「解説」はそのサブタイトル「ラナルド・マクドナルド評伝」にふさわしい，必読のマクドナルド論である。
20. マクドナルド，78-79 頁。
21. 同上。
22. 同上，82 頁。

主要参考文献

※本文中に記載した玉井の業績については省略する。

ウィリアムズ，レイモンド，山本和平他訳『田舎と都会』晶文社，1985 年
小樽商科大学百年史編纂室編『小樽商科大学百年史』通史編・学科編，小樽商科大学出版会，2011 年
金沢康雄「－人と自然をこよなく愛した－玉井武先生を憶う」,『緑丘』90 号，148-150 頁，2001 年
河野真太郎『〈田舎と都会〉の系譜学：20 世紀イギリスと「文化」の地図』ミネルバ書房，2013 年
齋藤一『帝国日本の英文学』人文書院，2006 年
ダイ，エヴァ・エミリ，鈴木重吉・速川和男訳『英学の祖－オレゴンのマクドナルドの生涯』雄松堂出版，1989 年
豊田　実『日本英学史の研究』岩波書店，1939 年
中本毅彦「故玉井武先生を偲ぶ会（正気寮 OB 会)」,『緑丘』91 号，105-106 頁，2002 年
峯村文人「日本古典文芸と北方的性格」,『小樽商科大学開学記念論文集』第一分冊，39-76 頁，1949 年
ルイス，ウィリアム，村上直次郎編，富田虎男訳訂『マクドナルド「日本回想記」－インディアンの見た幕末の日本』再訂版，刀水書房，2012 年

『小樽商科大学新聞　緑丘』全 3 巻，不二出版，1992 年
『緑ヶ丘』(編集：墓目英三)，1 号（1958 年 5 月)～ 88 号（1973 年 6 月）
※墓目が事実上個人で編集・発行していた後援会誌。現在は編集体制を新たにした『緑丘』(1973 年～）が発行されている。